

この人の小説は 2 冊目だけれど、最初から読み手をぐいぐいひきつける。

民と一族のために小さい国の王が首を落とすところから始める。しかも首を落とす相手の王に恨み言ひとこと言わず感謝して首を落とされるのである。

「え！ 何これ！」とびっくりして読み進めてしまった。思えばここにもこの小説の「戦いを挑まず・・・」自分の命で多くの民や家族が戦わずして守られるなら・・・という思いであると思う。

それにしても日御子の時代といえは 200 年代から 300 年代のことである。この時代、日本は弥生時代末期で稲作を中心に地方の豪族が出てきたころ。庶民は茅葺の粗末な家に住んでいて、生きるのがやっとの暮らしだったと思う。そんな時代に海を越え韓国を超え、漢まで何度となく行ってすでにこの時代異文化交流をなしていたのである。

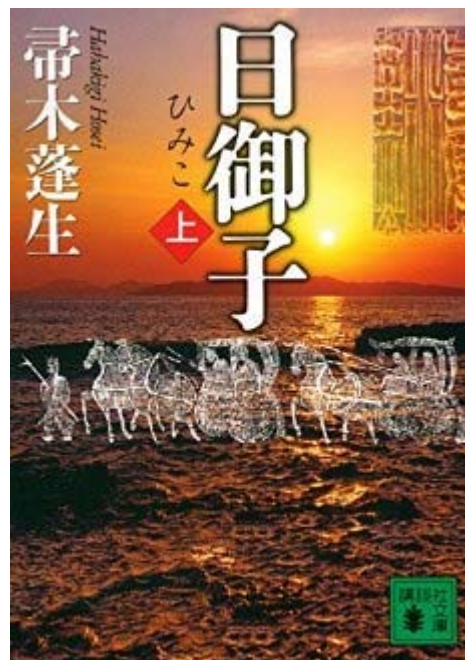
しえきの 6 代も続いた家だけれど、文字も紙も持たない日本がよく漢語を理解したものだと感心する。

粗末な日本の船で使えき（漢語の通訳）と生口（せいこう一奴隷・意味合いは少し違うように思うが）と朝貢（ちょうこう一貢物）を携えて何か月も時には 3 年もかけて訪問するのである。灰という初代から 6 代にまたがる 300 年くらいのしえきが日御子を絡めたドラマというほうがいいのかもかもしれない。

日本のこの時代に漢では文字を使い馬がひく鉄道まであった。この文化のひらきにびっくりする。

また、作者はこれを書くのにどれだけ調べたのだろうと感心してしまう。この人の主題には知生と温かさがあると思う。知性だけでは冷たいし、温かさだけではどうにもならない、それにこの小説にはアドベンチャーの組み合わせりがははきぎほうせいテーマのように思う。

それと以前読んだ井上靖の「おろしや国酔夢たん」や「ジョン万次郎」なども面白かった！！



観劇に感想

「追憶のアリラン」 劇団きづがわ 6月18日(土)

このところなかなか感動的は芝居に出会ってない。年のせいで感動が沸かなくなったのかと思っていたが、久しぶりの感動的な芝居でした。終戦間近で日本人と韓国人が憎しみ合うだけでなく、パクチョンナと豊川夫妻の心通わせていた人もいたこと。また、豊川の子を亡くした親の悲しみから、改めて亡き親を思ってほろりとさせられました。

これを在朝の友達が見たらどう思うかな？（一緒に見に行く予定だったので）“日本からの見たドラマよ。” って言うかなとも思ったけれど、イヒョサム（寺島由浩）の迫力ある演技で韓国人の怒りは伝わったと思う。